

### 「附属学校の歴史と伝統」

#### —平成19年度筑波大学附属学校教育局夏期研修会講演(2)—

附属学校教育局 木村範子

講演者はカリキュラム思想史研究の立場から、これまで附属学校の教育史資料の整理・保存と研究に取り組んできている。今回の講演ではその一端である筑波大学附属の歴史と伝統をテーマに、

- ① 附属学校の沿革—各附属学校のはじまり—
- ② 附属の伝統の特徴と意義—近代における高師附属の役割よりみた—
- ③ 近代教育研究の要—明治期における附属小学校の教授法研究を中心に—
- ④ 今後の展望—伝統を生かした豊かな教育文化の創造のための四点から講演を行った。

筑波大学の附属学校は、明治以来の伝統を持つ。本年7月23日「筑波大学ギャラリー」が開館し、谷川彰英教育長主導のもと、附属の先生方のご協力によって、附属学校の史資料展示がなされた。そこでまず、講演の第一の柱をその概要を知っていただく絶好の機会においた。続いて、教育研究のメッカであった本校は、高師以来、学問研究と実践研究の融合を伝統とし、また、中等教員養成が主軸であったが、小学校の意義は教員養成研究の視点から重視され

てきた伝統を特徴とすることにふれた。こうした初等中等を貫く附属学校の歴史と伝統が育む教育文化の厚みと深みは筑波大学の基幹であり、力強さである。歴史と伝統に支えられた我が校の歩みをいとおしく振り返りながら、これからの底力の歴史を皆で築いていきたい。そんな思いだけは込めた講演としたつもりである。



### 附属学校教育局 夏期研修会全体の概要

附属学校教育局 菅野和恵

8月24日、筑波大学東京キャンパスG501教室において、筑波大学附属学校教育局主催の夏期研修会が開催されました。研修会は、夏と春の年2回開催されるもので、今回は、筑波大学附属学校教員と都内の公立小・中学校からの参加者12名を含めて130余名が参加しました。

研修会は、二つの講演とバイオリン独奏の三部構成で行われました。講演(1)は、NHK解説委員の早川信夫氏により、「解説委員から見た教育の現場」という演題で行われました。学校の先生に求められる力、教育再生会議、教育改革の今後などに関する話題が示され、現在の教育状況や教員の果たす役割などを考える上で非常に役に立つ講演でありました。講演(2)は、上でも詳しく述べられています。木村範子講師(人間総合科学研究科・附属学校教育局)が、「附属学校の歴史と伝統」という演題で行い、筑波大学附属学校の沿革や今後の展望が話題にされ、附属学校の役割を改めて考え直すよい機会となりました。また、講演1と講演2の間に、若手バイオリニスト小林正枝氏によるバイオリン独奏があり、バッハ、クライスラーなど3曲が演奏され、その素晴らしい演奏に酔いしれました。

次回の春期研習会は平成20年3月27日(木)に開催される予定です。



### 指導教員の取組み

#### 神出鬼没の2年半

附属学校教育局 下山晃司

附属学校教育局準研究員の下山晃司です。正確には指導教員ではありませんが、指導教員の先生方とともに附属学校に関わる仕事をしています。2005年4月に着任してからこれまでの私の附属学校への関わりを紹介する良い機会ですので、この2年半で取り組んできた内容を簡単に紹介します。

附属学校関連の仕事をまとめると、以下のようになります。

1. 教育相談
2. 児童・生徒への対応について附属学校教員との協議
3. 附属学校の委員会活動への協力
4. プロジェクト研究「心理学の授業」の企画および実施

1の教育相談は、児童・生徒およびその家族が相談室に入室し、必要に応じて継続的に教育相談を行っています。附属学校の児童・生徒およびその家族は無料で相談室を利用できる点は、筑波大学附属学校の長所の一つと考えられます。2の協議は、年間行事になっているものから、立ち話程度によるものまで、児童・生徒の学校生活に役立つような情報交換を行っています。3はこれまで附属中・高、駒場中・高の保健委員会の活動に協力してきました。4は坂戸高校、聴覚特別支援学校高等部、視覚特別支援学校高等部(予定)など、高校生に役立つであろう「心理学の授業」を実施してきました。

このように、様々な場面で附属学校の児童・生徒や先生方と関わってきましたが、これからは「神出鬼没」で各学校にお邪魔しますので、よろしくお願いします。

### 温故知新

#### 修学旅行発祥の学校

附属高等学校副校長 高澤耕一

欧米の学校教育を模して作られた日本の教育制度の中で、一風変わった教育形態が修学旅行です。英国(18世紀)の上流階級の若者は、教育活動の総仕上げとして、大陸の各地に旅行して見聞を広げることを行っていました。規模も期間(数ヶ月~数年)も、現在の修学旅行とは比べものにならない壮大なものでした。しかし、このような習慣(?)が欧米の学校教育の中に積極的に採り入れられた形跡はありません。ところが日本では、1886(明治19)年、東京師範学校が「長途遠足」と称して、11日間の日本最初の修学旅行を行っています。

東京高等師範学校附属中学校では、1895(明治28)年に最初の修学旅行が行われました。全校生徒が霊岸島(隅田川の中州の埋め立て地)から出発して、鎌倉に宿泊する1泊2日の行程の旅行が組まれました。翌年からは、房総への修学旅行が4泊5日で行われています。

1905(明治38)年の「東京高等師範学校附属中学校一覽」には、『修学旅行』という表現が使われていて、「旅行遠足二関スル内規」が記載されています。1910(明治43)年度の内規(18条)の一部抜粋を次に示します。

○修学旅行ハ学年別ニ舉行スルヲ以テ本トス。○旅行ニ際シテハ予メ各学科教員ヨリ旅行ニ関スル指導講話ヲナシ旅行地ノ略図及ビ旅行案内等ヲ与ヘ置キ更ニ実地ニ就キテ指導教授ヲナシ帰校後旅行日記ヲ差出サシム。○附添教員ハ宿泊後適当ノ時間ヲ見計ラヒ自ラ座長トナリテ談話会ヲ開キ当日見聞シタル事項・次日ニ観察注意スベキ事項其ノ他修学上・訓練上必要ト認ムル事項ニ関スル談話ヲナシ日記ノ書キ方等ヲ指導ス。内規にも記載されているように基本的には修学・訓練の要素が強いのですが、大正から昭和にかけての修学旅行では、綿密



な事前学習と旅行中の精力的な観察指導、宿での検討会、旅行後の記録集の出版と、自身の濃い教育活動が展開され、研究面がより強く打ち出されることになりました。これには地理・歴史を担当し、フィールドワークを重視した山本幸雄先生達の熱心な指導が関係していました。1918(大正7)年に行われた4年生の中山道・東海地方への5泊の修学旅行概要を次に示します。

1日目、飯田町ヨリ甲府マデ汽車、甲府見学、上諏訪マデ汽車、見学、宿泊(歩行里程二里半)。2日目、岡谷マデ汽船、製糸場見学、奈良井マデ汽車、鳥居峠ヲ経テ蓼原マデ徒歩、木曾福島マデ汽車、見学、宿泊(歩行里程三里)。3日目、徒歩寝覚床ニ至リ更ニ上松ニ引返シ、多治見マデ汽車、陶器製造所見学、名古屋マデ汽車、見学、宿泊(歩行里程四里)。4日目、名古屋見学、鳴海マデ電車、桶狭間見学、大高ヨリ浜松マデ汽車、見学、宿泊(歩行里程三里半)。5日目、掛川マデ汽車、佐夜中山、大井川ヲ経テ島田マデ徒歩、静岡マデ汽車、見学、宿泊(歩行里程六里半)。6日目、草薙マデ汽車、久能山三保松原ヲ経テ江尻マデ徒歩、汽車ニテ帰京(歩行里程四里半)。

修学旅行発祥の地・東京師範学校の斬新な発想を受け継いで、日本の教育界に向かって、新たな試みの発信が期待される所です。

### 私の学校の 名物先生 vol.9

#### 附属桐が丘特別支援学校の名物先生 —村上友良先生—

附属桐が丘特別支援学校副校長 吉沢祥子



木訥と言う言葉がありますが、この言葉はまさに当校の村上友良先生のイメージを彷彿とさせます。巧言令色という印象は先生の日常からは微塵も伺えません。雄弁に物語るとか、理路整然と自説を開陳するなどということは、先生はむしろ苦手とされていますが、当校にあってその存在感は、学部運営の場でも宴席の場でも他の先生を圧倒していると言えます。テニスの腕前も抜群で(インストラクター並み)、攻撃をしかけるよりも、相手のどんな球でも必ず受けて返すという粘り強い試合運びは、まさに先生の気質を表しています。

先生は昭和54年に赴任されて以来、肢体不自由の子どもたちに、時には課外でカラオケの相手もしてやりながら、数学を根気よく教えて来られました。また、重度の障害を持つ子どもたちの自立活動の指導と研究にも長く携わって来ておられます。現在は主事として、当校の2つあるキャンパスのうち、病院併設のキャンパス(施設併設学級)を束ねています。古武士のような風貌を持ちながら、常に大河のように穏やかで、日常接している限り、子どもたちや同僚に、語気荒くものを言うのを聞いたことがありません。当校の子どもも多くは自力で移動やトイレができない

ので、校内での子どもの介助や宿泊行事などで、体重のある子を担ぎ上げたりしなければならぬ時には、先生はいつのまにか黙ってその役を引き受けています。

皇統の歴史にゆかりの深い隠岐の島の出身である先生は、また、魚の味についてはとても敏感です。学校の周りの居酒屋はほとんど先生とは顔なじみのようですが、先生が現れると、特にうるさく注文をつける訳ではないのに、出す魚にとても気を遣うとか。隠岐の島の墓守が黙々と天皇の陵を護って来たが如く、子どもたちの様子や校舎の此処かしこに気を配り、学校の「味」も落とさないように、静かに、しかし揺るぎなく目配りしているのが村上先生です。